

「逆向転移」に関する研究の展望

A review on research of backward transfer

羅 沢宇

文化政策学部
英語・中国語教育センター

LUO Zeyu

Faculty of Cultural Policy and Management
The English and Chinese Language Education Center

本稿は、「逆向転移」(backward transfer)、あるいは「第二言語が第一言語に与える影響」(effect of the second language on the first)という現象(呼び方について、羅2015,2016、Cook 2003,2016などを参照されたい)に関する研究の展望論文である。この分野の代表的な文献と研究成果をアプローチとモデルごとにまとめ、既存の研究との接点も考察しつつ、研究の潮流と発展、限界と問題点等を提示し、これからの研究の可能性を展望する。

This paper is a review article on research of a phenomenon called "backward transfer", "effect of the second language on the first" (see Cook 2003, 2016 etc.) or "逆向転移" in Japanese (see 羅2015, 2016, etc.). We first take an overall view of the major theses and landmark findings on this subject, and then discuss on what range does it enrich or reform our knowledge about the bilinguals' language knowledge and language use. And then, we discuss on the shortage of current research and possibilities of further research of this field.

キーワード:

逆向転移 マルチコンピテンス 研究展望 backward transfer multi-competence

1. はじめに

1.1. 本稿のねらい

外国語学習者が学習しようとする目標言語(target language/TL/second language/L2)¹が学習者の母語(mother tongue/L1/first language)に与える影響、すなわち「逆向転移」(backward transfer/reverse transfer)について、筆者は、今まで中国人日本語学習者を対象に、それぞれ、産出する「逆向転移」と思われる中国語の実例(羅2015)、性差や外国語レベルといった学習者属性との関連性(羅2016)、学習者の言語意識と自己認識との関係(羅2017)に焦点を当て、初歩的な解明を試みた。

しかし、紙幅の関係で本来最初に記述すべき「逆向転移」研究の理論的枠組みと隣接分野との関係、並びに研究の潮流と発展等、いわゆる研究の位置づけと先行研究の問題に関しては、各論文が議論する範囲に合わせ、必要最小限の言及にとどまった。

本稿はこの不足を補うために、既出の研究成果の整理と研究方向の展望を目的としている。

1.2. 「逆向転移」とはなにか

先行研究の整理を行う前に、まず外国語学習者に見られる「逆向転移」とは何であるかについて、羅(2015)が取り上げた「发表」(発表)の例をもう一度見てみよう。

例1)は、筆者が実際見聞きした、用例収集当時20代の女子大学生が、授業中、日本語のわからない教員や学生がいる中、不特定多数の人に向けて発した言葉である。例2)は、ある日本のコンビニチェーンが上海で人気キャラクターとのコラボ店舗(の開業)を発表するイベントの背景にある文字を抄録したものである。

1) *今天的英语课轮到我发表。²
(今日の英語の授業は私の発表の番だ。)

2) *○○³主题店铺开店发表。
(○○テーマ店舗開店発表)

※下線は筆者より。用例直後の括弧は、筆者が推測した発話者が言おうとする内容の日本語訳である。以下同。

現代中国語の「发表」(cf. 日本語の「発表」)には、
a) 意見・声明・談話などを公表する と b) 文章などを新聞や雑誌に載せる
という2つの語義区分がある。(白水社『白水社中国語

¹ 用語の問題に関しては、羅(2015)を参照されたい。なお、本稿は「母語」と「目標言語」に統一する。

² 本来「*」は非文(文法上不適格)の判断を表し、不自然な文なら「?」や「??」で示するのが慣習であるが、本稿では非文と不自然な文を一括して、「*」で示す。なぜなら、実際ある成人母語話者が発する母語の文が自然か、それとも不自然か、ひいては不適格なのかを、誰でも納得がするように厳密に分けることは、外国語の誤用分析(学習者の間違い)の場合と異なり、極めて困難であるからである。また、人によっては判断が分かれ、母語話者同士でもコンセンサスを得るのが難しいという事実も、別の調査で明らかになった。

³ 個人情報や商業的な要素で、かつ本稿の議論に直接的な影響がないと筆者が判断した部分は、○○に置き換えた。以下同。

辞典』より)

しかし、例1)のように、意見や声明ではなく、みんなの前で何かについて「発表」(プレゼンテーション)をする場合や、例2)のように、開店の「発表」(宣伝や記者会見)などの場合は、そのどちらにも当てはまらない。

プレゼンテーションとしての「発表」は、中国語で「(上台) 发言/做报告/汇报」と言うほうが自然であり、開店の宣伝や記者会見としての「発表」の場合は、「(新闻) 发布会/记者会」など、より自然な表現がある。

この中国語の「发表」と日本語の「発表」との違いは、かなり典型的なもののようで、類義語辞典にもしばしば取り上げられている。例えば国際語学社『日中同形異義語1500』では、「作品などを世間の人に見せたり聞かせたりする」場合は、「汇报」という中国語を用いるべきであるとしている。したがって、例1)と例2)は下記のように添削したほうが自然であろう。

3) 今天的英语课轮到我(上台)发言/做报告/汇报。

4) ○○主题店铺开业(新闻)发布会/记者会。

中国語の母語話者であっても、緊張による言い間違いなど、不自然な中国語の表現を産出すること自体、特に珍しいことではないが、例1)と例2)のような「发表」の場合、

a) 日本語を学習したことのある中国人の言語使用から複数回確認されるが、一般的に正しいとされる使われ方ではない。また、許容度の調査においても、日本語習得経験のある人は、ない人と比べて比較的このような使われ方を許容していることも明らかになっている(羅2015, 2016)。つまり、日本語の学習経験による影響が考えられる。

b) より適切な表現(「发言/做报告/汇报」など)がすでに存在しているにも関わらず、わざわざ同形類義語にあたる「发表」(cf. 日本語の「発表」)を用いることは、一般的に新しい概念の追加を伴う他言語からの「借用」(borrowing. Haugen 1950など)という概念だけでは十分に解釈しきれない。

ただし、「借用」との関係も深く(Odlin 1989: 12-14)、特に言語間接触による語彙や言語構造の借用に関しては、接触言語学の草分けであるWeinreich (1953)においても本格的議論があった。

c) 例1)のように、日本語がわからない人も含めている不特定多数の人に対し、一般的に不自然とされる表現を文の一部に組み込める形で使用することは、「文中コードスイッチング」(intrasentential switch、日本語訳は田崎2006: 58による)やコードミキシング(code mixing)のような、通常両方の言葉に関する知識のあるバイリンガル同士でしか行われない高度なコンテキスト依存の現象(田崎2006: 63)とも異なる。(§2.2.2節 Grosjean氏の提案する「言語モード」も併せて参照されたい)

ただし、場合によっては、コードスイッチングとほとんど区別がつかないこともあるとOdlin & Yu (2015: 2)が指摘している。

d) 例2)のように、書き言葉やそれに近い媒体においても用例が観察される。書き言葉(文字言語)は話し言葉(音声言語)に比べ、考慮や整理の時間が長く与えられ比較的規範性が高いとされている。したがって、書き言葉の

媒体で見かけられる不自然な用例は、第二言語習得の誤用分析の分類(牧野訳Ellis 2003: 42-46)でいうと、ただの(その場での)「言い間違い」(mistake)とも考えにくく、定着した一貫性のある「誤り」(error)に近いものであると言える。さらに、用例の一部は、中国語のネイティブ同士の意思疎通にも支障をきたすほど、いわゆる「全体的誤り」(global error. 牧野訳Ellis 2003: 48-49)にも含まれているようである(詳しくは羅2015を参照されたい)。

上記のような現象は本稿がこれから検討する「第二言語が第一言語に与える影響」(effect of the second language on the first)、あるいは「backward transfer」という現象である(Cook 2003: 1など)。羅(2015)では、「backward transfer」の和訳を「逆向転移」とし、本稿もこの呼び方を踏襲したうえで、論を進める。

1.3. 本稿の構成

「逆向転移」に関する研究はまだ多くはないが、1990年以降、一部行われるようになってきた。

以下、第2章から、「逆向転移」と関連のある理論の枠組みを整理しつつ、代表的な文献と研究成果を提示する。まず§2.1では、「逆向転移」の上位概念としての「転移」研究の展開を簡単に振りかえ、その中の「逆向転移」の位置づけを確認する。それから、§2.2において、バイリンガル脳内の母語と目標言語の共存関係を描こうとするいくつか代表的なモデルを時系列的に概観する。§2.2.1ではCummins氏が初期に提唱した「風船説」(分離基底言語能力モデル= SUP モデル/ separate underlying proficiency model)と、後に修正案として提唱した「冰山説」(共有基底言語能力モデル= CUP モデル/ common underlying proficiency model)を紹介し、§2.2.2では、Grosjean氏の提唱した「言語モード」(language mode)という概念を紹介する。§2.2.3では、本稿の内容と最も関係が近いCook氏が提案する「マルチコンピテンス」(multi-competence)という考え方、及びその定義の変遷を整理しつつ紹介し、最後の§2.2.4では、その拡張バージョンとなる渋谷氏が提唱する「社会マーカモデル」を紹介する。

また、周辺的分野の研究結果の整理も重要な手がかりになると思われるため、§2.3節では、言語摩滅(language attrition)の研究、特に本稿と関係の深い第一言語摩滅の研究、発展が著しい脳科学によるバイリンガル研究、中国で展開される「欧化現象」の研究、認知言語学の使用基盤モデル(usage-based model)からのアプローチなどを取り上げる。

最後に第3章では、今後の課題を展望する。

2. 主要理論と代表的な文献

2.1. 言語転移

「逆向転移」という呼び名の通り、その上位概念は「(言語の) 転移」(transfer)である。第二言語習得(second language acquisition/SLA)の研究分野では、言語転移の研究、特に「母語干渉」(interference of mother tongues)の研究が、常に中心的課題の一つである。

2.1.1. 母語干渉（目標言語から母語への転移）

第二言語習得に関して一定の知識がある者であれば、誰もが「母語干渉」(interference of mother tongues)あるいは「負の転移」(negative transfer)といった言葉を聞いたことがあるだろう。

母語の知識や習慣が、勉強しようとする目標言語に（厳密には目標言語そのものではなく、学習者脳内で形成される「中間言語」(interlanguage)に）そのまま持ち込める場合は、よい転移、いわゆる「正の転移」(positive transfer)が起こり、逆に持ち込めない場合はいわゆる「負の転移」が起こる。直感的に、母語と目標言語との違いが大きければ大きいほど、すなわち言語間の距離が遠ければ遠いほど誤りが起こりやすく、習得もより困難であると考えられていた。第二言語習得研究の黎明期、「対照分析」(contrastive analysis)が全盛だった頃には、学習者の誤りは全て母語による「干渉」(interference)⁴の結果起こったものだという前提で研究が行われた。

後に、習得の難しさは母語と目標言語間の距離だけでは判断できず、誤用の多くも「母語干渉」によるものではないということが明らかになった。この事実によって研究の前提が根本から覆され、一時期「母語干渉」を過小評価する期間もあったが⁵、その後やはり母語の影響は無視できないという再検討の時期を経て、今では目標言語を習得する過程における母語の影響を否定する人はいないようである。Ellis (1994 : 302)によると、英語学習者の文法の誤りの中、「母語干渉」によるものが占める割合は30%～50%前後とする研究が集中している。(前出Table 8.1)

諸論考の中で、最初に「干渉」(interference)という言葉を用いて言語間の相互影響を説明したのは言語接触の先駆的研究として名高いWeinreich (1953)である(Cook 2003 : 1, Jarvis, & Pavlenko 2008 : 23)。Weinreich (1953 : 1)で「干渉」を下記のように定義した。

Those instances of deviation from the norms of either language which occur in the speech of bilinguals as a result of their familiarity with more than one language, i.e. as a result of language contact, will be referred to as INTERFERENCE phenomena. (Weinreich 1953 : 1)

※大文字は原書により、下線は筆者による。

(2つ以上の言語に精通しているということの結果、すなわち「言語接触」の結果によって二国語併用者の言語行動に現れる各言語の標準から逸脱する事例のことを「干渉 (interference)」の現象という。)

※訳文は神鳥訳Weinreich (1976 : 1)による。句読点は本稿の体裁に併せて変更。下線は筆者による。

「各言語の標準から逸脱する」という表現が含意しているように、Weinreich氏は、バイリンガルの言語行動に見

られる「干渉」という現象は、母語から目標言語へという一方的なものではなく、学習した目標言語から母語へという方向性もありうると示唆している。

ただし、その後の研究の流れは、母語による「負の転移」(「干渉」)であれ、「正の転移」であれ、学習者の中間言語の形成であれ、結局のところ、母語から目標言語へという片方向の影響にしか、研究者は目を向けなかった。転移研究のバイブルとされるOdlin (1989)も母語から目標言語への転移しか扱わなかった。もちろん、第二言語習得研究の最終目標は第二言語（本稿のいう目標言語）の教育と学習に貢献するところにあり、母語に目を向ける研究が少ないのもいわば当然の結果であると言えよう。

2.1.2. 転移研究の発展——転移の方向性

転移研究の分野において、Odlin (1989)以後の重要な発展としてJarvis, & Pavlenko (2008)がよく挙げられる。その§ 1.4-1.6節において、Jarvis, & Pavlenko (2008 : 10-19)は、「転移」⁶に関する大きな進展のあった8つの研究分野とその後の最新の研究を、実証的研究の例を挙げつつ整理した。その中には、本稿の検討対象である「逆向転移」に関する言及があった。

Jarvis, & Pavlenko (2008 : 12,17)によると、目標言語から母語への転移に関して、1990年代以前にはすでにその可能性を示唆する研究があり、前出のWeinreich (1953)にまで遡るが、1990年代以降その意義が再認識され、特にVivian Cook氏によって提唱されたマルチコンピテンス (multi-competence) という枠組みとそれに関する一連の研究（詳しくは§ 2.2.3節にて詳述）によって発展させられたという。また、同じ考えを持つGrosjean氏の研究（詳しくは§ 2.2.2節にて詳述）にも言及した。

そして、同書の§ 1.7節において、転移研究の歴史と現状から、言語転移を研究する際、研究間の認識のずれをなくすため、研究者全員が共有できる参照枠として、「言語知識・言語使用の領域」、「認知的レベル」といった転移の10の側面を取り出し、それに従って研究を位置付けるよう提案した (Jarvis, & Pavlenko 2008 : 20)。その10の側面のうちの一つは「方向性」(direction)であり、著者は「順向」(forward)、「逆向」(backward)、「側方向」(lateral)、「多方向」(bi- or multi-directional)の4種類を取り上げた。

最も一般的に認知される転移は、「順向」の転移である。それに対し、本稿の研究対象はその反対の方向をいく「逆向」の転移である。つまり、「逆向転移」は特殊なものではなく、今までの(「順向」の)転移研究と方向性において異なっているのみである。この考え方は、Odlin, & Yu (2015)など、その後の研究にも影響を与え、少しずつ言語転移に対する一般的な認識になりつつある。

なお、Jarvis, & Pavlenko (2008 : 17-18)では、方向性の指摘以外、例えば、「Of particular importance

⁴ もともとは心理学の用語である。「前に学習したことがその後の学習に影響を及ぼすことをいう。そして、前学習が後の学習を促進する時には正の転移 (positive transfer)、妨害するような場合には負の転移 (negative transfer) とよんでいる。」(有斐閣『心理学辞典』より。一部句読点変更あり。)

⁵ 例えば、学習者の文法の「誤り」の中、「母語干渉」によるものはせいぜい3%程度とするDulay, & Burtの研究もあった。Ellis (1994)とJarvis, S., & Pavlenko, A. (2008) も併せて参照されたい。

⁶ 同書では、転移のことを「transfer」ではなく、「crosslinguistic influence/CLI」と呼んでいる。

is the fact that L2 effects on the L1 are sometimes visible even in learners and speakers of a foreign language who are still residing in their native language context」(移住を伴わないL1環境においても、学習者や使用者からL2からL1への影響が観測できる」(同書：17-18。L1、L2は本稿のいう母語、目標言語のことである)など、「逆向転移」に関する記述が多く盛り込まれている。

2.2. 母語と目標言語の共存関係

前節において、上位概念である「転移」における「逆向転移」の位置づけと両者の接点を考察したが、前述したとおり、「転移」研究の中心的課題は伝統的な「順向」研究である。初期のWeinreich (1953)は、逆方向の転移の可能性について示唆はしたものの、それ以上の記述はなかった。Jarvis, & Pavlenko (2008)は方向性の研究を大きな進展の1つとしつつも、取り上げられる「逆向転移」の研究例は、前出のCook氏の一連の研究など、わずか数人の研究者に集中している。「転移研究の新視点」と謳う比較的に新しい転移の専門書であるYu, & Odlin (2015：1-2)においても、「逆向転移」に関して、Cook (2003)を挙げつつ、その存在を指摘し、コードスイッチング研究との関連性を言及するのみにとどまり、それ以上の展開はなかった。

なによりCook氏の一連の研究は、そもそも転移研究からのアプローチではなかった。したがって本章は、Cook氏の研究の原点であるバイリンガルの脳内の母語と目標言語(中間言語)の共存関係に関するいくつかのモデルと研究成果を取り上げる。

2.2.1. 「風船説」と「冰山説」

バイリンガル脳内の母語と目標言語の関係について、様々なモデルが提案されてきたが、最も有名なのがJim Cummins氏の提示した二つのモデルである。最初の一つは「分離基底言語能力モデル」(SUP モデル/separate underlying proficiency model)である。脳内の2つの言語は互いに独立しており、脳の容量は限られているため、一方の言語が発達するともう一方の言語が衰退すると予測するモデルである。

このモデルにおける2つの言語は、秤の両側に載っている2つの重り、あるいは限られたスペースにある2つの風船のように、互いに反対の方向に消長する。特に風船のたとえがわかりやすいため、俗に「風船説」とも呼ばれている。(図1左側)

しかし、一方の言語で習得した概念や知識がもう一方の言語の習得にも活かされているなど、「分離基底言語能力モデル」の予測を支持しない事実が次々と明らかになった。そこで、Cummins氏は改めて「共有基底言語能力モデル」(CUP モデル/common underlying proficiency model)を提唱した。バイリンガル脳内にある2つの言語は、表面的に独立しているように見えるが、基底部分では実際には共有されている部分があると予測するモデルである。

この場合、母語と目標言語という2つの言語はよく海に浮かぶ2つの冰山にたとえられており、2つの冰山は、水面上分かれているように見えても、水面下ではつながっている。したがって、「冰山説」とも呼ばれている。(図1右側)

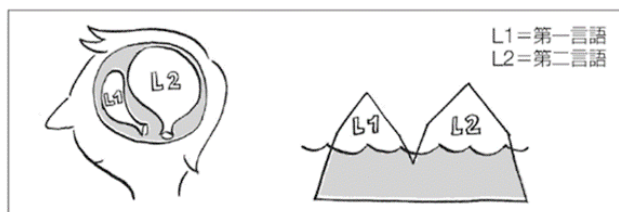


図1 風船説 v s 冰山説 出典：ヒューマンアカデミー (2017)：299

バイリンガルが操る2つの異なる言語に共通している部分があるという「共有基底言語能力モデル」は、現在研究者の間では一般的な認識になっている。後に出てくるモデルは多かれ少なかれこのモデルの考えを取り入れている。Cummins氏は、その後このモデルを「発達相互依存仮説」(developmental interdependence hypothesis)と「閾理論」(thresholds theory)に発展させたが、本稿では紙幅の関係で扱わないことにする。

2.2.2. 言語モード (language mode)

「共有基底言語能力モデル」以降提唱されたバイリンガルの脳内の2言語共存関係を扱う論著の中、バイリンガルの頭の中では2つの言語が独立して存在しているのではなく、統合されていると指摘したGrosjean (1989)は比較的影響力があった。

Grosjean (1989)は、まずバイリンガリズムを研究する際によく取られる「モノリンガルの視点」、すなわち、「バイリンガルは2人のモノリンガルであり、ほかのモノリンガルと同様に扱ってよい」という視点を批判し、より合理的な視点である「バイリンガルの視点」、すなわち、「バイリンガルは単なる2人のモノリンガル、あるいは不完全なモノリンガルではなく、特別な言語装置を持っている人と考えるべきである」という視点を持つ必要性を唱えた。

さらに、この「モノリンガルの視点」から「バイリンガルの視点」へのシフトは、様々な分野の研究にも影響していると指摘した。その中の1つは、「モノリンガルモード」対「バイリンガルモード」という「スピーチモード」(speech mode)の研究であるというGrosjean (1989：6-11)。

Grosjean氏は、後に「スピーチモード」の考えをさらに充実させ、「言語モード」(language mode)理論にまで発展させた。

「言語モード」について、Grosjean (2008：39)は下記のように定義した。

Language mode is the state of activations of the bilingual's languages and language processing mechanisms at a given point in time.

(「言語モード」とは、ある時点におけるバイリンガル脳内の複数の言語と言語処理メカニズムの活性化の状態である。)

バイリンガルの場合は基本的に、一方の言語を使用しているとき、もう一方の言語も多かれ少なかれ活性化しているとされている。図2はこの「言語モード」の連続体を図式化したものである。理解や産出中の言語はベースとなる言語 (base language) 「言語A」であり、もう一方の言語は「言語B」である。それぞれの色の濃淡は活性化の度合いを示し、1～3のどの時点においてもベースとなる

「言語A」は最も活性化されているが、もう一つの「言語B」は置かれる状況によって活性化の度合いが異なる。

「言語B」がほとんど活性化されておらず、抑制されている状況は「モノリンガルモード (monolingual language mode)」であり、両方完全に活性化されている場合は「バイリンガルモード (bilingual language mode)」である。ある時点 (例えば図2の1、2、3など) におけるバイリンガルの言語使用は、基本的にその中間のどれかの状態にいととされている (Grosjean 2008 : 39-41)。

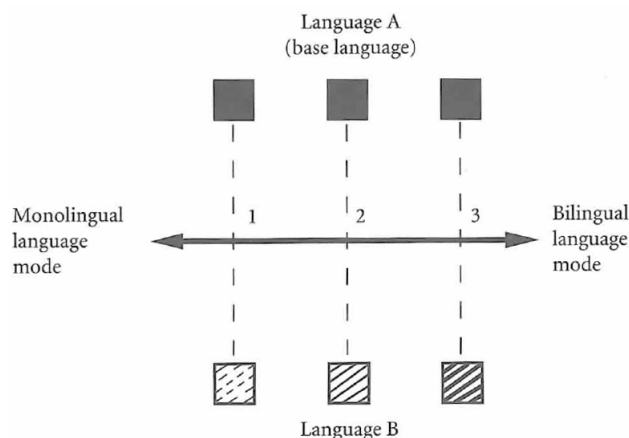


図2 言語モードの連続体 出典 : Grosjean(2008) : 40

したがって、図2が示したように、「言語モード」の視点でバイリンガルの言語使用を考える場合、ベースとなる「言語A」の見極めともう一方の「言語B」の活性化の度合いが2つの軸となっている。

なお、§1.2節で述べたように、バイリンガルの言語使用に見られる接触現象には、「転移」と「干渉」以外、「コードスイッチング」や「借用」などがあり、厳密に「転移」と区別するのが難しいとされている。

Grosjean (2012) は、「転移」をほかの近似現象から分離する唯一の方法は、調査執行者はバイリンガルであることを悟らせないようにするなど、被調査者を完全に「モノリンガルモード」の状況下にさせることであると論じた。また、静的・動的によって、「転移」と「干渉」を区別することが可能であり、「転移」は静的な、永久的な影響、「干渉」は動的なもの、ほかの言語に偶然紛れ込んだものと考えている。この場合、「干渉」は言語処理のプロセスに関連しているとGrosjean (2012) は考えている。

本稿は、「転移」と「干渉」を区別するスタンスこそ取らないが、一方の言語を使用しているとき、もう一方の言語が多かれ少なかれ活性化しており、問題の焦点はベースとなる言語の選定ともう一方の言語の活性化の度合いであるといった「言語モード」の結論は、「逆向転移」のメカニズムを解明する際、大変重要な手がかりになると考えている。

また、異なる調査環境と調査方法によって、同じ調査の結果が大きく異なるという事実も、「言語モード」の考え

で解釈できる。

2.2.3. マルチコンピテンス (multi-competence)

2つの言語がバイリンガルの脳内における関係について、初期のGrosjean (1989) と似たような考えを示したのはCook (1991) である。

Cook (1991) は、世界中多くの人が実際1つ以上の言語を知っているという事実と生成文法をはじめとする当時のほとんどの言語理論は均一な言語共同体にいる純粋なモノリンガルを想定していることとの矛盾を指摘することから始まり、「普遍文法」(universal grammar/UG) の存在を証明した生成文法の「刺激の貧困」推論をバイリンガルにまで適用し、「普遍文法のマルチコンピテンスモデル (multicompetence⁷ model of UG)」を提唱した (Cook 1991 : 110-111)。これが「マルチコンピテンス」モデルの初出である。

この「マルチコンピテンス」を、Cook(1991:112)では「the compound state of a mind with two grammars」(2つの言語知識が頭の中で統合された状態) と定義した。この「grammar」は、生成文法的意味合いで用いられており、単なる「文法」ではなく言語知識全般を指すが、一部誤解を招いたという (Cook 2008 : 17)。そのため、後にCook (2003:2) は「マルチコンピテンス」の定義を「knowledge of two or more languages in one mind」(頭の中での2つかそれ以上の言語知識) に変更した。さらに、バイリンガルの脳内の2つの言語 (LAとLB) の関係は図3を用いて説明している (Cook 2003 : 9)。図の左側は両言語が完全に分離された状態、右側は完全に重なり合って統合した状態である。その中間は、両言語が部分的に重なる状態であり、その重なり具合が無数にあること、つまり1つの「統合された連続体」(integration continuum) をなしていることを示している。

そして、この「マルチコンピテンス」の連続体は必ずしも言語全体に同じように適用するわけでもなく、音声、語彙など、カテゴリーによって重なり具合が異なるのも当然ありうるといふ (Cook 2003 : 9)。この定義は後に渋谷勝己氏によって「社会マーカモデル」と発展させられた。(詳しくは次節で説明する)

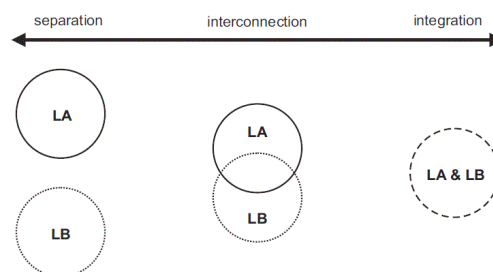


図3 脳内の2言語関係の統合的連続体 出典 : Cook(2003) : 9

なお、この統合的連続体としての「マルチコンピテンス」の考えとGrosjean (2008) の「言語モード」の連続体との違いについて、Cook (2003:10-11) は、言語モードの考えを「湯水混合水栓」(mixer tap) でたとえ、一

⁷ 初出のCook (1991) では「multicompetence」と綴るが、のちに「multi-competence」に変更した。

方の言語が活性化されればもう一方の言語も同時に活性化されるという「言語モード」の考えは、一見「マルチコンピテンス」と同じように両言語の部分的に重なりあう状態を認めているように見えるが、根底にあるのは、結局2つの言語と心的状況が脳内に分離して存在し、使用時に均衡をはかるという考えと指摘した。

それから、Cook (2003) は、Vivian Cook氏自身の論文をはじめ、約13本の論文によって構成されており、そのほとんどが、2001年Wivenhoe Houseホテルにて開かれたワークショップで各国の研究者によって発表された論文であるという (Cook 2003: 1)。「目標言語が母語に与える影響」、すなわち「逆向転移」に焦点を当てた最初の学術書であり、Jarvis, & Pavlenko (2008) や Odlin, & Yu (2015) など「逆向転移」現象を紹介する際、Cook (2003) の内容を中心に記述している。

なお、現時点 (2017年10月) で唯一正式に「マルチコンピテンス」という名を冠する学術書はCook (2016) であり、Cook (2003) の刊行のさらに十数年後ようやく出版されたのである。

このCook (2016: 3) において、Cook氏は、中心概念である「multi-competence」の定義をさらに「the overall system of a mind or a community that uses more than one language」(1つ以上の言語を使用する頭あるいは地域社会のシステム全体) にまで拡大した。Cook (2003) にあった「知識」という文言は中立的な表現である「システム」に置き換えられ、射程もバイリンガルの「頭」から「地域社会」へと拡大し、言語の社会的側面に目を向けた。(定義の変遷については、Cook 2016: 2-3、村端・村端2016: 7-12も併せて参照されたい)

ただし、この定義も暫定的な作業定義 (working definition) であり、「システム」と「地域社会」の解釈は読者に任せるのだという。また、Cookは、「マルチコンピテンス」は理論やモデルというより、言語習得を見る視点の一つと考えたほうがふさわしいと断った (Cook 2016: 3)。したがって、Cook (2003) のモデルが実質「マルチコンピテンス」の最後の理論モデルとなっている。

2.2.4. 社会マーカーモデル

Cook (2003) の2言語共存関係を描く「マルチコンピテンス」モデルに触発を受け、渋谷 (2013) は同一言語の変種を使い分ける能力を解釈することにも「マルチコンピテンス」のモデルが適していると考え、より統合的な「社会マーカーモデル」を提示した。

渋谷 (2013) は、まずCook (2003: 9) の統合的連続体モデル (図3) の両端 (LA、LB両言語が完全分離あるいは完全融合) の状況を除外し、部分的に重なり合う中間の部分のみ採用した。渋谷 (2013: 45) の考えた最も基本的な「社会マーカーモデル」は、人々はDominantコード (Dコード。母語やvernacularなど、支配的なもの) とSubordinateコード (Sコード。第二言語のようなDコード以外のもの) を習得するが、DコードとSコードは融合しており、その融合の度合いは程度問題である、というものである (図4も参照されたい)。

それをさらに発展させたものは、図5のような複数のコードを扱う多言語・多変種モデルである。渋谷 (2013:

47) は「複数のコードがひとりの話者の頭のなかでたがいに融合しあってストックされている」と考えている。また、この多言語・多変種能力は「つねに動くものである」、図4の「DコードとSコード、A・B・Cなどは常に変化する可能性をもつ」、「Bの複数コードで共用される部分は、とくにその発現を妨げる言語生態的な条件がなければ、認知的に常に最大を求め、言語や変種が同じ特徴をもつようになることを指向する」、「AやCの社会マーカーの部分は、当該言語や変種の話される言語共同体の言語生態的な要因に応じてさまざまに拡大あるいは縮小する」(渋谷2013: 48) といった、Cook (2003) ないしCook (2016) にはない独自の見解を提示している。

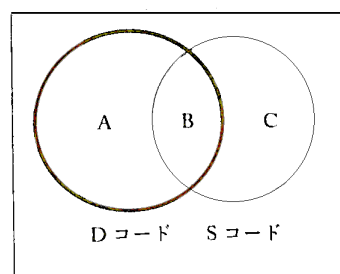


図4 社会マーカーモデルの基本形 出典：渋谷(2013): 45



図5 社会マーカーモデル 出典：渋谷(2013): 47

2.3. その他

§2.1～§2.2において、「逆向転移」のメカニズムの解明に寄与できる理論モデルを概観してきたが、本節では、傍証になるその他のいくつかの分野の研究成果を代表的な文献とともに紹介する。

2.3.1. 言語摩滅の研究 (language attrition)

まず、「言語摩滅」(language attrition。訳し方は金2010に従った)、特に母語 (第一言語) の摩滅の研究の展開を見てみよう。

この分野の中心的人物は、Monika S. Schmid氏である。Schmid (2011) は、第二次世界大戦の頃、ナチスの迫害から逃れるため、やむを得ずドイツを離れ、アメリカとイギリスに移住した2人のドイツ人の母語ドイツ語の維持状況を調べる調査から始まり、摩滅とはなにか、摩滅の鑑別、言語摩滅の特徴、言語内外的要因との関係、研究のメソッドロジーなど、言語摩滅研究の包括的研究である。そこに提示された結論と研究手法は「逆向転移」の研究にも応用できるものが多く含まれている。

ただ、「言語摩滅」研究の場合、金 (2010) が論じたように、移民あるいは帰国子女を対象に行われたものが圧倒的に多く、時に言語の保持と同時に行われている。移住を伴わない母語環境にいるバイリンガルと彼らに見られる

「逆向転移」は、厳密には(少なくともSchmid 2011の)研究対象ではない。したがって、「摩滅」研究の個々の結論や研究手法を「逆向転移」の研究に移植する際、細心の注意を払う必要があると思われる。

2.3.2. 脳科学的証拠

大石(2006、2011など)は、主に脳科学の立場から第二言語習得者の脳の動きについて調査している。大石氏の調査は、(調査当時日本ではじめて)光トポグラフィーを用いて、習得経験の有無、習得レベルなどによる脳血流の変化を調べるという手法を取っている。

今までの第二言語習得の研究は学習者のアウトプットや特殊なタスクによって引き出されたデータに頼るしかなかったが、脳科学からのアプローチは脳の活性化の部位や動きの解明という、もっと根本的な生物学のレベルで証拠や根拠を示し、学習者の脳内にある言語の関係や変化などを可視化することによって、結論の信憑性が格段と上がった。

「共有基底言語能力モデル」や「言語モード」の存在など、今までは仮説レベルのものであったが、脳科学的手法を導入することによってそれらの検証が生物学レベルで可能になった。

一方、人間の脳とその動きについて知られていることはほんの一部に過ぎず、脳科学からアプローチも、ほぼ検査設備の進歩や脳科学の発展と連動しており、今の段階では完全に脳科学の立場から「逆向転移」のメカニズムを解明することが難しいようである。

研究設備や脳科学理論の新しい進展に依存していることがこのアプローチの限界と言えよう。

2.3.3. 欧化現象

上記紹介した言語理論やモデルはほとんど西洋の研究であるが、中国では、「欧化現象」という「逆向転移」に近い現象を扱う独自の研究が展開されてきた。

中国語の「欧化」(westernized Chinese language)とは近代以降の中国語の西洋言語化、特に英語化のことを指している。例えば、受身を表す中国語の「被」構文は、本来日本語と同じように、被害や迷惑を含意するが、五四新文化運動以降、英語の影響を受け、次第に中立的な文脈においても受身表現が使われるようになってきたと言われている。

中国語の「欧化」を最初に論じたのは、王(1943)である。作者の王力氏は、近代中国語の変遷を論じる際、「欧化現象」を1つ大きな動因として取り上げている。王(1943)をはじめとする一連の研究は、主に文法を中心に、旧白話と五四以降の「新」中国語の用例との対比という論証の手法を取っている。

一方、「欧化現象」研究に対する批判も根強くある。その代表的な1人として、フランスの言語学者Alain Peyraube氏がいる。Peyraube(2000: 4-5)では、中国語の文法において、「欧化」による影響はかなり限られていると論じている。その根拠として、今まで「欧化文法」とされてきた用例の多くは古代の中国語にすでにあったということを指摘している。また、庄(2009)もPeyraube(2000)にならい、今まで「欧化文法」とされてきた文法表現を再検討した結果、「欧化」の過大適用の可能性を指摘し、警鐘を鳴らした。

「欧化現象」の研究も「逆向転移」の研究も、なにをもって目標言語の影響を証明するかという課題はいまだに未解決のままである。

2.3.4. 使用基盤モデル

最後に、認知言語学の「使用基盤モデル」(usage-based model)を用いて「マルチコンピテンス」を見直すHallほか(2006)の研究を紹介しよう。

具体的に、Hallほか(2006)は、文献調査に基づき、Cook(1991、2003、2016など)の提唱する「マルチコンピテンス」が考案される背景とその根幹となる3つの根拠を整理したうえで、「マルチコンピテンス」が根拠とする仮説の問題点と同じ枠組みの下で行われた研究間に見られる認識の相違を指摘した。

それらの問題点を克服するために、Hallほか(2006)は、社会的文脈や使用頻度との関係に関する研究の実例を挙げつつ、もっと認知的な「使用基盤モデル」という視点の導入を提案し、言語能力を安定した静的なシステムではなく、社会との毎日の関わり合いの中で形成される用法パターンの動的な集合体と再定義し、それに基づく新しい研究手法や調査対象の設定に関する提案を行った。

また、それに合わせ、新しい学術用語「communities of practice」、「communicative repertoires」などの導入、新しい調査法と実験対象なども提案された(Hallほか2006: 232-233)。

Hallほか(2006)とCook(1991)の根本的な考えの違いは、おそらく認知的基盤と生得的基盤の考えの対立から由来していると考えられる。Hallほか(2016)の批判を交わすように、前述のように、Cook(2016)は、「マルチコンピテンス」は理論ではなく、あくまでも1つの視点である、という見解を示した。また、Cook(2016)における「マルチコンピテンス」の定義は、地域社会の要素まで取り入れるなど、Hallほか(2016)が批判したバイリンガルの言語知識のみ扱うCook(1991)の定義とすでに大きく異なっている

3. 今後の課題(おわりにかえて)

ここ数十年間、「逆向転移」に関する研究は、少しずつ増えてきたとはいえ、いまだに十分に検討されていない部分が多く、村端・村端(2016: ix)では「質・量、両面からみれば、その研究はまだ萌芽期にあるといってもよい」と評した。

本稿は紙幅の関係で、理論とモデルに重きを置き、実証的研究を取り上げることができなかったが、代表的な実証的研究とその成果については村端・村端(2016)とCook(2016)を参照されたい。結論から言えば、全体的に、理論面の研究、実証面の研究、両方ともいまだに研究の中心が欧米、特に英語圏に集中しており、中国と日本における研究はあまり展開されていないようである。実証的研究の場合も、英語ともう1つの外国語との(逆向、側方向、多方向)転移を調べるケースが圧倒的に多かった。英語を中心とする研究の成果は、どこまで一般化できるか、その検証が目下の喫緊の課題である。そのためにも、日本語と中国語、日本語と韓国語など、英語以外の言語ペアを研究対象に広げるべきであろう。

また、日本では古くから「言語生活」の研究があり、中

国では昔から「欧化現象」の研究があるように、両国にはそれぞれ独自の独創的な研究の蓄積があり、西洋の研究動向ばかり追う必要はない。ただ、その場合、自国の独創的な研究成果をいかに西洋で提案されたモデルと結びつけ、さらなる発展を遂げるかは大きな課題になろう。

参考文献

a) 日本語文献

- Bialystok, E., Hakuta, K. (1994 / 2000訳). 外国語はなぜなかなか身につかないか: 第二言語学習の謎を解く. (重野純, 訳.). 東京: 新曜社.
- Ellis, R. (1997 / 2003訳). 第二言語習得のメカニズム. (牧野高吉, 訳.). 東京: 筑摩書房.
- Lightbown, P. M., Spada, N. (2013 / 2014訳). 言語はどのように学ばれるか: 外国語学習・教育に生かす第二言語習得論. (白井恭弘 & 岡田雅子, 訳). 東京: 岩波書店.
- Sebba, M. (1997 / 2013訳). 接触言語: ビジン語とクレオール語. (田中孝顕, 訳.). 東京: きこ書房.
- Weinreich, U. (1953 / 1976訳). 言語間の接触: その事態と問題点. (神鳥武彦, 訳.). 東京: 岩波書店.
- 東照二. (2000). バイリンガリズム: 二言語併用はいかに可能か. 東京: 講談社.
- 乾善彦. (2010). 日本語と中国語の接触がもたらしたもの. 日本語学, 29 (14), 45-54.
- 大石晴美. (2006). 脳科学からの第二言語習得論: 英語学習と教授法開発. 京都: 昭和堂.
- 大石晴美. (2011). 脳科学から見た第一言語習得と第二言語習得 (特集 第一言語習得と第二言語習得). 日本語学, 30 (7), 50-59.
- 金昴京. (2010). 帰国子女の日本語の維持と摩滅. 日本語学, 29 (14), 183-195.
- 迫田久美子. (2002). 日本語教育に生かす第二言語習得研究. 東京: アルク.
- 真田信治 (編.). (2006). 社会言語学の展望. 東京: くろしお出版.
- 真田信治, 渋谷勝己, 陣内正敬, 杉戸清樹. (1992). 社会言語学. 東京: おうふう.
- 真田信治, 庄司博史 (編.). (2005). 事典日本の多言語社会. 東京: 岩波書店.
- 真田信治, Long, S. D., 朝日祥之, 簡月真 (編.). (2010). 社会言語学図集: 日本語・中国語・英語解説 (改訂版). 武蔵野: 秋山書店.
- 渋谷勝己. (1996). 現代に生きる方言. In ヨーゼフクライナー (編.), 地域性からみた日本: 多元的理解のために (pp. 92-118). 東京: 新潮社.
- 渋谷勝己. (2008). 新たなことが生まれる場. In 金水敏, 乾善彦, 渋谷勝己 (編.), 日本語史のインタフェース (pp. 101-203). 東京: 岩波書店.
- 渋谷勝己. (2010a). 言語接触研究の動向 (特集 言語接触の世界). 日本語学, 29 (14), 6-15.
- 渋谷勝己. (2010b). 移民言語研究の潮流: 日系人日本語変種の言語生態論的研究に向けて. 待兼山論叢. 文化動態論篇, 44, 1-23.
- 渋谷勝己. (2011). 書評・紹介 Mufwene, Salikoko S. Language evolution: contact, competition and change. 言語研究, (139), 145-156.
- 渋谷勝己. (2013). 多言語・多変種能力のモデル化試論. In 片岡邦好, 池田佳子 (編.), コミュニケーション能力の諸相: 変移・共創・身体化 (pp. 29-51). 東京: ひつじ書房.
- 清水崇文. (2009). 中間言語語用論概論: 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育. 東京: スリーエーネットワーク.
- 白井恭弘. (2008). 外国語学習の科学: 第二言語習得論とは何か. 東京: 岩波書店.
- 白畑知彦, 若林茂則, 村野井仁. (2010). 詳説第二言語習得研究: 理論から研究法まで. 東京: 研究社.
- 陣内正敬, 田中牧郎, 相澤正夫 (編.). (2012). 外来語研究の新展開. 東京: おうふう.
- 陣内正敬. (2007). 外来語の社会言語学: 日本語のグローバルな考え方. 京都市: 世界思想社.
- 鈴木恵理子. (2013). 中国人日本語学習者の逆行転移: 日本滞り期間に注目して. 秋田大学国際交流センター紀要, 2, 3-18.
- 高木千恵. (2006). 関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相. 阪大日本語研究.
- 高木千恵. (2010). 標準語との接触による地域語の変容. 日本語学, 29

(14), 74-83.

- 田崎敦子. (2006). コードスイッチング研究の概観: 多言語社会のコミュニケーション分析に向けて. 言語文化と日本語教育. 増刊特集号, 第二言語習得・教育の研究最前線, 2006, 54-84.
- 徳川宗賢. (1978). 単語の死と生・方言接触の場合. 国語学, 40-46.
- 野田尚史, 迫田久美子, 渋谷勝己, 小林典子. (2001). 日本語学習者の文法習得. 東京: 大修館書店.
- ヒューマンアカデミー. (2017). 日本語教育教科書 日本語教育能力検定試験 完全攻略ガイド 第4版. 東京: 翔泳社.
- 北京大学中国語文学系. (2004). 現代中国語総説. (松岡栄志, 古川裕, 訳.). 東京: 三省堂.
- 村端五郎, 村端佳子. (2016). 第2言語ユーザのことばと心: マルチコンピテンスからの提言. 東京: 開拓社.
- 尹テレサ. (2014). 韓国人日本語学習者における第二言語から第一言語への転移現象: 授受表現「てもらう [a/eo batda]」形に焦点を当てて (<特集>多言語社会日本の言語接触に関する実証研究). 社会言語科学, 17 (1), 49-60.
- 尹テレサ. (2016). 第二言語から第一言語への言語転移現象に関する実証的研究: 韓国人日本語学習者の「てもらう [a/eo batda]」表現に注目して (博士論文). 東京学芸大学.
- 羅沢宇. (2015). 目標言語から母語への逆向転移の実例: 日本語から中国語へ. 静岡文化芸術大学研究紀要, 15, 89-96.
- 羅沢宇. (2016). 逆向干涉の度合いと被調査者の社会的属性について: 調査の結果から. 静岡文化芸術大学研究紀要, 16, 55-62.
- 羅沢宇. (2017). 外国語学習者が「逆向転移」に対する評価と認識: インタビュー調査の結果を踏まえて. 静岡文化芸術大学研究紀要, 17, 23-29.
- 若林茂則, 須田孝司. (2004). 英語習得の「常識」「非常識」: 第二言語習得研究からの検証. (白畑知彦, 編.). 東京: 大修館書店.

b) 英語文献

- Bauer, L., & Trudgill, P. (Eds.). (1999). *Language Myths*. London ; New York: Penguin Books.
- Cook, V. (1991). The Poverty-of-the-stimulus Argument and Multicompetence. *Second Language Research*, 7(2), 103-117.
- Cook, V. (Ed.). (2003). *Effects of the Second Language on the First*. Clevedon ; Buffalo: Multilingual Matters.
- Cook, V. (2008). Multi-competence: Black Hole or Wormhole for Second Language Acquisition Research? In *Understanding Second Language Process* (pp. 16-26).
- Cook, V., & Singleton, D. (2014). *Key Topics in Second Language Acquisition*. Bristol: Multilingual Matters.
- Cook, V., & Wei, L. (Eds.). (2016). *The Cambridge Handbook of Linguistic Multi-Competence*. Cambridge ; New York: Cambridge University Press.
- Grosjean, F. (1989). Neurolinguists, Beware! The Bilingual is not Two Monolinguals in One Person. *Brain and Language*, 36(1), 3-15.
- Grosjean, F. (2008). *Studying Bilinguals*. Oxford University Press.
- Grosjean, F. (2012). An Attempt to Isolate, and then Differentiate, Transfer and Interference. *International Journal of Bilingualism*, 16(1), 11-21.
- Hall, J. K., Cheng, A., & Carlson, M. T. (2006). Reconceptualizing Multicompetence as a Theory of Language Knowledge. *Applied Linguistics*, 27(2), 220-240.
- Han, Z. (Ed.). (2008). *Understanding Second Language Process*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Haugen, E. (1950). The Analysis of Linguistic Borrowing. *Language*, 26(2), 210-231.
- Jarvis, & Pavlenko (2008). *Crosslinguistic Influence in Language and Cognition*. New York, NY: Routledge.
- Köpke, B., Schmid, M. S., Keijzer, M., & Dostert, S. (2007). *Language Attrition: Theoretical perspectives*. Amsterdam ; Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Odlin, T. (1989). *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Odlin, T., & Yu, L. (2015). Introduction. In *New Perspectives on Transfer in Second Language Learning* (pp. 1-16). Bristol ; Buffalo: Multilingual Matters.
- Pavlenko, A. (2014). *The Bilingual Mind: And What it Tells Us about Language and Thought*. Cambridge ; New York:

Cambridge University Press.

Peyraube, A. (2000). Westernization of Chinese Grammar in the 20th Century: Myth or Reality? *Journal of Chinese Linguistics*, 28(1), 1-25.

Schmid, M. S. (2011). *Language Attrition*. New York: Cambridge University Press.

Trudgill, P. (2001). *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society* (Fourth Edition). London ; New York: Penguin Books.

Trudgill, P. (2004). *Dialects* (Second Edition). London ; New York: Routledge.

Yu, L., & Odlin, T. (2015). *New Perspectives on Transfer in Second Language Learning*. Bristol ; Buffalo: Multilingual Matters.

c) 中国語文献

曹敏.(2014)・语言迁移中反向迁移的研究及展望. 安阳工学院学报, (1)・117-120.

曹勇衡.(2006)・《语言迁移与二语习得:回顾、反思和研究》述评. 现代外语, (4)・431-433.

常晓宏.(2014)・天外“求索”文库:鲁迅作品中的日语借词. 天津:南开大学出版社.

陈珺寅.(2012)・鲁迅作品量词研究(硕士论文)・安徽大学.

陳力衡.(2011)・试论近代汉语文体中的日语影响. 東アジア文化交渉研究別冊, 7, 43-53.

冯天瑜.(2004)・新语探源:中西日文化互动與近代汉字术语生成. 北京:中华书局.

郭锐.(2016)・汉语叙述方式的改变和“了”结句现象. 中国語学, (263)・1-19.

黄怀飞.(2011)・第二语言习得中的逆向迁移研究. 青海师范大学学报(哲学社会科学版), (6)・117-120.

黄丽恋.(2011)・第二语言输入对第一语言语音变异的影响(硕士论文)・福建师范大学.

李颖玉.(2010)・基于语料库的欧化翻译研究(博士论文)・上海外国语大学.

李运博.(2006)・中日近代词汇的交流:梁启超的作用与影响(日文版)・天津:南开大学出版社.

刘培云.(2016a)・国内语言反向迁移研究15年. 科教文汇(下旬刊)・(1)・145-148+167.

刘培云.(2016b)・汉语欧化与语言反向迁移:联系与区别. 佳木斯职业学院学报, (2)・326.

刘薇.(2012)・二语对母语的语用反向迁移研究(硕士论文)・辽宁师范大学.

罗泽宇.(2015)・量词“匹”特殊义项的生成与消亡——从日语对汉语影响的角度. 日本学研究, 24, 1-9

沈国威.(2010c)・近代中日词汇交流研究:汉字新词的创制、容受与共享. 北京:中华书局.

沈国威.(2011)・现代汉语“欧化语法现象”中的日语因素问题. 東アジア文化交渉研究別冊, 7, 141-150.

沈国威.(2012)・回顾与前瞻 日语借词的研究. 日语学习与研究, (3)・1-9.

孙冬慧.(2014)・汉语EFL学生反向迁移实证研究(博士论文)・东北师范大学.

王东志.(2009)・语言迁移研究的新视角:二语对母语的迁移. 北京第二外国语学院学报, (12)・14-21.

王雯.(2014)・异化翻译视角下日语借词的研究(硕士论文)・哈尔滨理工大学.

文秋芳.(2010)・二语习得重点问题研究. 北京市:外语教学与研究出版社.

文秋芳, 王立非.(2004)・二语习得研究方法35年:回顾与思考. 外国语(上海外国语大学学报)・(4)・18-25.

吴慧君.(2014)・语用反向迁移研究(硕士论文)・上海交通大学.

徐桂梅.(2012)・鲁迅小说语言中的“日语元素”解析. 鲁迅研究月刊, (2)・45-51.

俞理明, 常辉, 姜孟.(2012)・语言迁移研究新视角. 上海:上海交通大学出版社.

周琴.(2011)・英语作为目标语对汉语的反迁移现象分析(硕士论文)・西华大学.

朱一凡.(2011)・翻译与现代汉语的变迁(1905-1936)・北京:外语教学与研究出版社.

庄黄腾.(2009)・现代汉语语法欧化论的全新审视(硕士论文)・复旦大学.

d) 辞書類

李行健.(2010)・现代汉语规范词典(第二版)・北京:外语教学与研究出版社.

伊地智善繼.(2002)・白水社中国語辞典. 東京:白水社.

郭明輝, 磯部祐子, & 谷内美江子.(2011)・日中同形異義語1500. 東京:国際語学社.

